

拝啓 今年も2月下旬春が目前の頃となりましたが、皆様いかがお過ごしでしょうか。いつもエンカウンターお読みいただきありがとうございます。2月末に次男がタイ人の女性と結婚することになり、結婚式出席のため、2月25日から3月6日まで、タイに行ってまいります。そのため、第107号は、少し早く発送させていただきます。我が家の玄関前は、パンジー、水仙のほかになんぞつ買ったしたプリムラ、オダマキ、サクラソウ、ルピナスなどが、真冬というのににぎやかに咲いております。

相沢良一先生の「黒潮の神学」の第10回をお送りします。相沢先生の「黒潮の神学」に出ている文章は長いのですが、エンカウンターの1ページに収まるように、一番大切と思われる所を選んで編集して載せているわけです。その作業は結構楽しい作業です。また相沢先生もヒルティエ先生と同じように、聖書の引用が自由自在にお出来になる方だったという印象を受けます。

毎月1回南原研究会で、南原先生の著作集を順を追って読んでいますが、2月は、第6巻の「ゲーテ『ファウスト』の課題」という昭和20年の5月、終戦の直前、学徒勤労動員されている陸軍工廠において行われた講演を読みました。南原先生は、明治42年に新渡戸稲造校長が、一高生徒に特別講義を聞いておられますが、新渡戸先生の講演の一節に、「僕は青年の頃よりカーライルに私淑したが、カーライルはゲーテを師と仰いだ。僕にとってゲーテは師匠の師匠というわけだ」とありました。

また関連で、斎藤孝先生の『座右のゲーテ』（光文社新書）を読んで紹介しましたが、ゲーテのことばを2、3ご紹介します。

・いちばん良いのは対象を10か12くらいの小さな個々の詩に分けて描くことだろう。大きな全体を丸ごと包括的につかもうとすると、完璧なものなんて、まず出来っこない。

・独創性とよくいわれるが、それは何を意味しているのだろう。偉大な先輩や同時代人に恩恵を被っているものの一つ一つをあげれば、後に残るものはいくらかもあるまい。

今上野の国立博物館で、3月6日まで、平山郁夫・仏教伝来展が開かれています。奈良の薬師寺大唐西域壁画殿の平山画伯が描かれた壁画が10枚ほど全部見られますが、これは迫力があります。東京にお住まいの方で、時間に余裕のある方はぜひご覧になられますようお勧めいたします。

花の咲き乱れる春は目前です。どうぞお体ご自愛のほど祈り申し上げます。

敬具

平成23年2月23日

山口周三

エンカウンターの読者各位